

## 2013年日本青年台湾研修旅行を終えて

(公財)交流協会では、日台友好交流促進を目的として、6月17日～21日の日程で若手の地方公務員、学生を対象に台湾研修旅行を実施しました。今回参加者に研修の感想をいただきましたのでご紹介します。

### 良好な日台関係を知る旅

甲賀晶子(奈良県:政策研究大学院大学修士課程)

平成25年6月17日(月)～21日(金)の日程で2013年日本青年台湾研修に、政策研究大学院大学から計4名参加させていただきました。

羽田空港から約3時間で、台北松山空港に到着。週末、東京と奈良を片道4時間かけて移動している私にとっては、とても近く感じました。場所によっては国内旅行より台湾旅行の方が気軽な旅行なのかもしれません。

まず、初日は台湾の外務省にあたる外交部を訪問しました。そして、夜は、外交部の主催による歓迎会を催していただきました。歓迎会では台湾の民族舞踏を小学生の皆さんが披露してくださり、とても和やかな雰囲気の中に歓迎会は終始しました。また、歓迎会を催していただいた会場が、日本統治時代に建立されていた台湾神宮の跡地を利用し建設された「円山大飯店」で、その素晴らしい建物にもまた一同感激いたしました。

研修2日目は公益財団法人交流協会台北事務所を表敬し、台湾と日本の歴史的な繋がりや現在の両国の情勢、また現政権の政情などについてご説明いただきました。2日目に日台関係についてのレクチャーをいただけたことにより、この後の研修が大変有意義になり、実り多いものとなりました。

今回の研修では、観光部局担当者が多いという

こともあり、台北市観光旅行局をはじめ、台北市の主要観光地である、台北101や猫空ロープウェイ、士林夜市などにも積極的に連れて行っていただき、台湾の魅力を思う存分、味わうことが出来ました。

研修3日目は、台湾新幹線で台南へ移動しました。台南市政府を表敬し、その後、烏山頭(うさんとう)ダムの視察をさせていただきました。

台南市は今でこそ農業が盛んですが、大正9年に着工され4年後に完成した烏山頭ダムが無い時代は、雨による洪水と干ばつの繰り返しで、安定した農業が出来なかったとのことでした。

現在に至るまで日本にシンパシーを送ってくださっている台湾は、実はこのダム建設や灌漑設備を手掛けた八田興一氏(はった・よいち)への畏敬の念や、このような台湾の社会資本の整備にかけた日本の度量の大きさ、真剣さや技術の高さに



烏山頭ダムの畔にある八田興一氏の銅像

対する感謝の念を、台湾社会は今でも大事にしているからだとの説明を受け、そのことに大変感動いたしました。

昭和17年にフィリピンに向けた大洋丸に乗っていた八田氏は57歳の時、アメリカの潜水艦に撃沈され亡くなりました。漁船に引き上げられ、故郷の石川県で荼毘に付された後、遺骨が烏山頭に戻され、この地に墓が建立されました。

烏山頭ダムにより満々と湛えられた湖の前に、八田氏の銅像があり、お花が置かれていました。現在烏山頭ダムにある八田氏の銅像はダムの完成後の昭和6年に作られたもののだそうですが、その後国家総動員法に基づく金属類回収令の施行時や、中華民国による日本の建築物や顕彰碑の破壊がなされた際も、地元の有志によって守り隠され続け、昭和56年に再びダムを見下ろす元の場所に設置されたそうです。まるで、八田氏がまだ見ぬダムの完成の姿を思い描いているようでした。

日本人にはほとんど知られていない八田氏ですが、台湾ではアニメにもなっていました。台湾の人たちにとって大変身近な存在だと言えます。八田氏は、土木作業員の労働環境を適切なものにするため尽力したこと、危険な現場にも進んで足を踏み入れたこと、事故の慰霊事業では日本人も台湾人も分け隔てなく行ったことなど、彼の人柄による功績は非常に大きいと感じました。

現在の日台関係があるのは八田氏のおかげであると言っても過言でないほど、八田氏の功績は素晴らしいものだと思います。そして、この八田氏の功績を、日本人はもっと知るべきであると感じました。今回の研修で、台南を訪問させていただけたことは、日台関係を理解させていただく上で非常に貴重な経験となりました。

4日目は、地元台湾の大学生と一緒に、グループに分かれて、台北市にある指定の史跡等へ行ったり、指定のお店で台湾料理を食べたりするオリエンテーリングを実施しましたが、私は体調を崩



政策研究大学院大学から参加した4人と全行程を共にしてくれた台湾の学生さん達

してしまい、悔しい思いをいたしました。ですので、再度、台湾を訪れたいと思っています。

また、最終日の夕食は救国団が主催で晚餐会を開催してくださり、大いに盛り上がり、とても楽しい時間を過ごさせていただきました。お土産にいただいた、研修中の写真が収まったCDデータは、今でも大切にしています。

今回の研修に際し、公益財団法人交流協会様、台北駐日経済文化代表処様、亜東太平洋司様、台北市政府観光伝播局様、救国団様、台南市政府観光旅遊局様には大変お世話になりました。ここに感謝いたします。

また、全行程を同行してくれた台湾の学生の皆様には、通訳、現地の案内など多大な活躍をいただきました。彼・彼女らと共に行動できたことは、思い出深い、楽しい研修となりました。あわせて、ここに感謝いたします。

最後に、今回の研修を通して出会った方々に感謝申し上げるとともに、この出会いが今後の日台関係のますますの発展につながりますようお願いいたします。

## 祈りの姿

田沼彬文（東京大学大学院修士課程）

今回の研修旅行では各所で非常に歓迎していただいた。まずこのことで重東関係協会を初め、台湾の政府関係者の方々、現地で研修をサポートして下さった方々（とりわけ救国団の方々）、研修の手配をしていただいた交流協会の皆様には、いくら感謝をしてもしきれない。一大学院生の私にとっては過分なご歓待をいただき、ただただ恐縮するほかない。初めて訪れた台湾で、さまざまな施設や観光名所を見学させていただきだけでなく、現地の大学生と交流する機会もあるなど、得たものは大きかった。

だが読者には、おそらくすでに日台間の実務に携わっておられるか、日台関係について平均的な日本人よりも強い関心をお持ちの方々が多いのではないだろうか。そうした方々に対してあえて文章にしてご紹介するとすれば、私は台北市の台湾省城隍廟で受けた印象を取り上げたいと思う。

研修4日目は団全体が少人数のグループに分かれて台北市内の散策を行ったが、筆者は4名のメンバーと共に、台湾の大学生2名の案内で、かつての城中区のあたりを回ることになった。ちょうど昼頃で、飲食店などが所狭しと並ぶ市場は人があふれ、活気に満ちていた。その市場のすぐ近く、何台ものバイクが並ぶ通りに面した一角に、鮮やかな赤や黄色で彩られた城隍廟はあった。城隍とは街の守り神のことである。市場の中ほど人は多くないものの、少なからぬ人が、都会の喧騒に妨げられることもなく、中で熱心に祈りを捧げていた。おそらく観光客ではなく、現地の人々であろう。その姿は、レセプションで我々を歓迎してくれたのとも、研修の最中我々を案内してくれたのとも、商店などで短いやり取りをしたのとも違う、台湾の人々の姿であった。我々も案内に従ってお

線香をあげ、それぞれに願い事をして、その場を後にした。

無論、城隍廟で目にした現地の人々が一体何を祈っていたのかは知る由もない。別に日台の友好関係の発展を祈っていたわけでもないだろう。しかしながら、日本人の見ていないところで、日台の友好を願い、またそのために行動している台湾人がいなければ、今日の関係はありえないということにも同時に気付かされたのである。一般論として、経済的な結び付きが深まることや、地理的・歴史的・文化的な近接性は、それ自体で友好的で平和的な関係性の保証となるものではない。お互いのことを知れば知るほど好きになる、ということが常に成り立つわけではないのである。何の摩擦も困難もない関係など、そもそも存在しないのだ。ましてや日台間のように、経済関係などの物質的な面がいかに充実しようとして、すでに外交関係がない状態で安定的な関係を維持することは、本来必ずしも容易ではないのだろうと想像する。今日の関係は、実務に携わっておられる方々の奮闘の賜物なのだろう。

このように考えると、国境を越えて友好的な関係を築くために不可欠なのは、平たく言えば「どうしてもこの人々と仲良くしたい」という願いであり、またそうしないわけにはいかないという現



元々本誌への掲載を意図して撮られた写真ではないが、城中市場の内部の様子が辛うじて窺えると思う。



台湾省城隍廟の内部に安置されていた像（どのように呼称するのが正確なのかは分からない）。城隍廟の全体を写したような写真は取り損ねていた。この像は城隍廟の奥深くではなく、内部に入っ  
てすぐ右手に安置されていた。

状況認識に根差した行動の積み重ねなのではないだろうか。この点で、日台関係は単に良好であるというだけでなく、我々に勇気や希望を与えてくれるものでもあるだろう。筆者にとってこの研修は、日台関係のさらなる進展のための決意を新たにさせてくれるだけでなく、台湾以外の国や地域と日本とのつながりについても教訓を与えてくれるものとなった。

とはいえ、個人の立場で実際にできることというのはなかなかないかもしれない。せめて、さまざまな喧噪の中にあってもそれに惑わされることなく、まずは真摯に友好関係を祈るところから始めてみたい。

## 2013 年日本青年台湾研修旅行レポート

阿久澤 光彦（前橋市）

この度の台湾招聘事業について、交流協会から突然メールが届き驚きました。

また、交流協会の方とは、昨年東京銀座にある群馬県のアンテナショップ（ぐんまちゃん家）で開催されたサロンD（情報交換会）において名

刺交換をしたことがきっかけでした。

前橋市はインバウンドについてはほとんど手掛けていない状態で、更には自分が外国に1回しか行ったことがなく、参加について非常に悩みました。

しかしながら、交流協会の方は、「外国に行き慣れていない、公務員の方の参加を歓迎！」とのことでした。

このメールの件を、家族にも相談しましたが、理解、家族決裁を受けることが一番の難関でした。

しかしながら、周りからの意見で台湾の治安や言葉の心配がないことを聞き、家族に伝え理解を得ることができ、周囲からも後押しされ決心しましたが、県内から1人の参加と言う事に抵抗はありました。

また、今回の台湾招聘事業は、全額台湾政府が負担していただだけ、行政からの負担も一切なく、業務として出張ができるということで職場からの了承を得ることができました。

### 「台湾情勢について」

台湾とは時差が日本より1時間遅く、ほとんど日本と変わらない状況であります。また、羽田空港から台湾の松山空港へは3時間と、近い国です。

台湾の気候は日本と似ていて、6月は梅雨で今回の研修中は、毎日35℃近くあり湿度が高くとても暑い日ばかりで、毎日天候に恵まれました。お陰様で、毎日台湾ビールを美味しくいただくことができました。

台湾の交通機関としては、スクーターバイクが主でかなりの数に驚かされる状況でした。そのバイクは2人乗りまではOKとなっております。「スクーター大国の台湾!」とも言われ、1.8人に1人はバイクを保有しているようです。

そこで、感心したこととして走るマナーや停めるマナーが良いことです。

駐車場もあまり見当たらず、歩道や車道の白線内に、整列してバイクや自動車が停められてい

る状況です。

また、信号機を見て驚かされたのが、電光カウントダウン方式です。これは日本にも是非取り入れて欲しいと思いました。

研修の中で、台北から台南（最南端は高雄まで全長 345km）までの移動手段で、台湾高速鉄道（日本の新幹線技術）を利用しました。ほとんど日本の新幹線とは変わりがなく、快適な感じを受けました。

台北では、台北捷運（MRT）の地下鉄も利用しました。こちらのチケットは、プラスチック製のコインチップで、持ち帰ることはできません。

また、この取り組みは「ごみの減量化」にもつながっているようです。



台北城市グループ探索にて①



台北城市グループ探索にて②

移動手段として、タクシーも利用し、初乗りは 70 元（日本円で約 210 円）で、ドアは手動、行き先の指示は住所を書いた紙や地図などで位置を示せば、目的地まで送っていただき心配がいらぬです。

車の運転では国際免許は通用しないようですが、日本の運転免許証を中国語に翻訳したものが必要となり、日本自動車連盟（JAF）、ならびに交流協会が発行できるようです。

台湾から日本へ訪れる観光客の数は、世界の中でも 3 位と多く、近いうちに、更に順位が上がりそうです。

また、近いうちに学校の教科書にも日台会話のやり取りが取り上げられるようです。

台湾人は、大河ドラマが好きで、日本の雪・温泉・海山物産を好み、歴史にも興味があり、日本の小説を読む人が多いようです。

更には、産業などが遅れていた台湾に、病院や鉄道などの建設に日本人が貢献し、歴史を変えて行き、今でも台湾の人々は日本人を尊敬しているようです。

### 「台湾研修の中で」

台湾政府の表敬訪問のあいさつの中で、「日本の若者が台湾に来ていない！」

そのため、今回の研修を通じて台湾の国のイメージを「日本に持って帰って欲しい！」と台湾政府に告げられました。

日本側からは長谷川団長のあいさつで、「台湾招聘事業は今年で 4 年目を迎え、年齢制限をしたのは今回初めてで、参加者も一番若い年齢層であると説明され、また、2 年前、東日本大震災では、多大の支援をいただき日本人は皆感謝の気持ちでいっぱいです！」とお礼を述べられました。

台南市局長のあいさつの中で、今後より多くの日本各都市と友好都市を結んで行きたい！日本人の八田與一氏により、台南市にダムや水路を作り、農業振興に大きく貢献し、記念館により功績が紹介され、現地も視察させていただきました。

台南市には、毎年5,000人の日本人が訪れているとのことでした。

また、台南市は群馬県前橋市とは深い縁があります。

その理由として、日本人最後の台南市長として、前橋市（富士見町）出身の「羽鳥又男氏」がいたことです。今では、出身地である前橋市（富士見町）のお寺に銅像として、台湾大富豪者より寄贈され祀られております。

台湾にダムを造ったことで知られている、八田與一氏は石川県金沢市生まれの技師で、郷里の金沢市には資料館もあり、台湾から訪れる人も沢山いて、加賀屋という有名な旅館には、年間1万人以上の台湾人が宿泊されるそうです。

是非この様に、前橋市にも何れ仕掛けられたら良いと思いました。

今回、貴重な台湾研修でもあったので、群馬県前橋市を全国から海外へ向けPRしようと思いました。

そこで、前橋市は豚肉の産出額が全国でもトップクラスであり、マスコットキャラクターとして「TONTONのまち前橋の“ころとん”」が活躍しております。

研修中では、ストラップや缶バッジを日本青年団員と台湾政府関係者や台湾の大学生などに配

り、群馬県前橋市をPRしました。特に女性からは「可愛い！」と好評でした。

今回の研修を通じて、参加者のほとんどが観光分野の所属だったため、今後の業務や情報の収集に活かして行けたら良いと思いました。

また、研修中に他県の方が、インバウンドでやり取りしている台湾の旅行会社の方と現地で交流を図り、そこに同席させていただき、情報交換ができ参加させていただき良かったです。

今回の招聘事業の目的は、「台湾をよりよく理解するため」、台湾現地機関などを表敬訪問し、座談会と研修を通じ、日台間の友情と相互理解を深めることとしており、参加した日本青年団員の方は、それぞれに好印象を持たれ交流が図れたことと思います。

研修では前泊し交流会が設営され、自己紹介及び名刺交換をしたことにより、お互いを知り、台湾の研修に望むことができ、不安であった台湾研修も、日本青年団員と台湾政府関係者や台湾の大学生とで交流が図れたことにより、日台がより近くなったような気がしました。

今回の研修で、同行された日本青年団の皆様ならびに台湾関係者の方々、また事務局でご苦労いただいた交流協会の方々には、大変お世話になりました。



前橋市からのお土産を渡す



故宮博物院前に前橋市“ころとん”参上